

## 伊万里・有田焼のものづくりを考えるイベントの開催

NEXTRAD 1st Exhibition 「Go Forward -磁器のものづくりに関する“13P”の挑戦-」

の企画立案および運営支援

浜野 貴晴

promoduction(プロモダクション) 代表 / 佐賀県窯業技術センター 外部アドバイザー

国立大学法人 佐賀大学 肥前セラミックセンター 客員研究員

有田町 クリエイティブアドバイザー



### 1. はじめに

伊万里・有田焼の窯元の若手有志 13 名(13 Person)で構成される「NEXTRAD/ネクストラッド」は、2021 年 10 月 22 日(金)、23 日(土)の 2 日間、佐賀県有田にて初の展示・体験イベント「Go Forward -磁器のものづくりに関する“13P”の挑戦-」を開催した。NEXTRAD は、有田焼産業における持続可能な未来を考え発信することを目的に活動する集団として、2017 年に設立。メンバーは、窯元の若手経営者および後継者として、それぞれに特色あるものづくりを行なっているが、月例で開催している勉強会にて各社の取り組みや産地の抱える課題・方向性などを議論している。私はファウンダー、アドバイザーとして参画している。

### 2. 目的と経緯

日本初の磁器として誕生以来、400 年の歴史を誇る有田焼。しかしながら、現在、有田焼産業は「受注減」「利益率減」「後継者・人材不足」「原料や燃料の高騰」など多岐にわたる課題を抱えている。これらの問題は産地内で度々議論されるものの、具体的な解決策の実施には至っていない。

もの余り時代と言われる様々な商品がひしめく市場に対し、多様化するライフスタイルに即した商品開発・ブランディングを行うための情報収集や分析そして企画力、有田焼のものづくりや魅力を伝える情報発信力の重要性はより高まっている。

その窯元若手有志13社の集まりであるNEXTRAD/ネクストラッドでは、今後も永く有田焼産業に携わっていきつくり手として、日々取り組んでいること、そしてこれからの産地でのものづくりのあり方について、自分たちの将来を見つめ議論を重ねてきたことを、窯業関係者から一般消費者まで広く多くの方々と共有したいという想いから、産地に人を招き入れる展示・体験イベントを企画した。

イベント内容としては、メイン会場にて、磁器の製造工程から、各社の様々な技や美などの特徴を紹介する展示、SDGs への取り組みに関するパネル展示と産学連携による応援型チャリティとして規格外品の社会実験販売、金継ぎ体験ワークショップを計画。さらに人数限定の予約制にて、2つの窯元の工場や作業風景を見学できるオープンファクトリーを2日間にわたり実施することとした。

### 3. イベント実施概要

#### 3.1 展示イベント(製造工程)

会場となった佐賀県陶磁器工業協同組合のショールーム「ARITA MONONOSU」では、メイン展示として、実際に使用する材料や道具とともに作業風景のパネルなど、原料となる陶石から順を追って磁器の製造工程を紹介した。



原材料や道具など、製造工程を紹介した展示会場風景

さらに、今回のイベントのタイトルにもなっている、有田焼をより深く理解していただくために導き出した“P”を頭文字とする13のキーワード(Porcelain 磁器 / Process 工程 / Polyethism 分業制 / Professionalism 専門性 / Peculiarity 独自性 / Planning 企画 / Prototype 試作 / Production 生産 / Pricing 価格設定 / Path 流通 / Promotion 販売促進 / Purchaser 顧客 / Partnership 協働)を紹介した印刷物を配布し、展示物とともに窯元が有田焼のものづくりについて自ら説明。参加者とつくり手が産地の現状や課題を共有し、これからの磁器のものづくりを一緒になって考えていくことを目指した。



窯元が自ら、展示物や工程について説明を行う

#### 3.2 展示イベント(各社の特徴)

メイン展示を取り囲むように、13の窯元もそれぞれが自社ブースを設けたが、自らの強みや得意な技術1つに展示テーマを絞り、自社のものづくりの特徴を紹介した。

徳永 弘幸氏(徳幸)は、自社の転写技術をテーマに選定。器を埋め尽くすような華やかな加飾が特徴の有田焼らしい伝統的な多色の絵柄を表現するために、20数版ま

で刷り重ねた細かいパーツが並ぶ転写シールのシートを展示するとともに、その技法を紹介。長らく転写に対する市場の認識は、安価に量産するための技法とされてきた。しかし、手描きでは困難な極微・精密なグラフィックなどシルクスクリーン印刷だからこそできる表現の可能性を探る。



転写紙に印刷された様々なパーツの現物を実際に貼り付けた器を用いて、転写の技法について紹介した「徳幸」の展示

原田 吉泰氏(吉右エ門製陶所)は、割れてしまったり廃番品となり、これまで廃棄してきた素焼き生地を再利用できないかと考え、粉碎した素焼き粉を釉薬として再調合した「泡化粧」の加飾技法について紹介。限りある天然資源である陶土の有効活用という、SDGs(持続可能な開発目標)に通ずる取り組みでもある。



粉碎した素焼きの実物や釉薬の製造工程をパネルにて紹介した「吉右エ門製陶所」の展示

畑石 修嗣氏(畑萬陶苑)は、調香師とコラボし、香水とのセット販売を企画した鍋島の伝統的絵付けを施した新作の携帯式のアトマイザー香水瓶を紹介。金属製のスプレー部品とねじ切り部分を噛み合わせる高い精度の瓶の製造技術とともに、中身となる香水の原料と絵柄を合わせた商品企画をものづくりのストーリーとして伝える。アルコー

ル消毒液を入れて使用することもできる、現代のニーズを的確にとらえた商品でもある。



「香り」をテーマに新商品の企画やストーリーを紹介した「畑萬陶苑」の展示

各窯元の展示テーマは以下の通り。

川副 史郎氏(川副青山)

「成形、焼成変形を塾考し、複雑な形状を焼き上げる。」

徳永 弘幸氏(徳幸窯)

「転写技法を駆使して、加飾の可能性を探る。」

北川 朝行氏(北川美宣窯)

「代々受け継ぐ彫刻の技、多様な形状を削り出す。」

前田 洋介氏(皓洋窯)

「形×絵柄で構成する器のマトリックス。」

藤本 和孝氏(貝山製陶所)

「大物づくりと彫り文様、自社完結のものづくり。」

藤本 浩輔氏(藤巻製陶)

「深みある青白磁の可能性、引き算の美学。」

下村 耕司氏(福泉窯)

「絵の具、釉薬、泥しよう、筆使いの表現を極める。」

森田 文一郎氏(文翔窯)

「成形されたものに手を加え、無限に広がるかたちの世界。」

原田 吉泰氏(吉右エ門製陶所)

「大切な原料の有効利用が、新しい表現へと昇華する。」

福田 雄介氏(福珠窯)

「伝統の絵付けの技、伝統に留まらない新しい表現。」

田中 克幸氏(田森陶園)

「陶土の持つ味わい、柔らかさを感じる磁器。」

畑石 修嗣氏(畑萬陶苑)

「香りのうつわ 企画を伝えるものづくり。」

山本 晃平氏(やま平窯元)

「独自に改良した透光性陶土、薄さと白さへのこだわり。」

消費地で行われる一般的な展示会では、商品の紹介が中心となるのに対し、今回のイベントでは、産地で開催するからこそ、商品だけの展示に終わらせず、つくり手自らがその背景やストーリーを伝えるため、完成品でなく、工程や素材を展示紹介する窯元も多く見られた。

### 3.3 SDGs への取り組みに関するパネル展示

SDGs への取り組みに関するパネル展示では、磁器のものづくりが抱える課題として、予防措置が困難な瑕疵が現出してしまふ実情と検品基準のあり方、産業廃棄物、CO<sub>2</sub>の排出について NEXTRAD としての見解を紹介した。



13 枚のパネルにて SDGs への NEXTRAD としての取り組みや提言について紹介

天然原料を用い、分業制による多くの職人の手を経て製造される磁器において、例えば「鉄粉」や「ピンホール」と呼ばれる焼成品の生地や釉薬の表面に現れる小さな黒点や異物、突起や凹みをなくすことは困難を極める。しかしながら、鉄粉やピンホールなどは極小であってもすべて欠陥とみなされ、そのほとんどは、規格外品として扱われ、陶器市などを通じたセール品販売、もしくは産業廃棄物として処分されている。

昨今の SDGs への意識向上、環境負荷軽減の社会情勢、来たる将来の脱炭素社会を目指していく上で、こうした規格外品の扱いをそのままにしておくことに向けられる世間からの目はより厳しくなっている。

つくり手として、納得できる商品をお客さまの元に届けたいという想いから、窯元は、日々、技術の向上や生産管理

に努めてきた。また、パートナーシップを結ぶ陶土、型、生地製造事業者との連携、さらに、販売を託す商社とも意見交換を行い、不具合への対応策を検討していることを紹介した。



SDGs に関する展示パネルの一部

また、近年複雑かつ精密な形状への要望が多くなったことに伴い、焼成時の変形防止のため、「ハマ」と呼ばれる専用の窯道具の必要性も高くなるが、一度焼成したハマは再利用できず、廃棄処分する以外の処理方法はない。量産品を製造する産地であるが故、生地の成形には石膏型が多く用いられるが、この石膏型も消耗品であるため、摩耗した型は廃棄される。しかしながら、石膏型も再資源化が難しく、ハマ同様、現状埋め立て処理されている。こうした産業廃棄物の軽減および再資源、再活用化のための研究も今後の課題である。

さらに、脱炭素社会に向けて社会活動の見直しが進む昨今であるが、磁器を製造する上で、焼成という工程は欠かすことができない。現在、有田焼を製造する多くの窯元は、その焼成に化石燃料を用いたガス窯を用いており、

結果多くの CO<sub>2</sub> を排出しているものの、その実情について産地内にて把握した例はこれまでみられないことから、今回どの程度の CO<sub>2</sub> を排出しているのか算出を試みた。

NEXTRAD のメンバー13 社の1年間の燃料ガスの総使用料：約 214.1 トンから推計した、13 社の窯焚きによる CO<sub>2</sub> の総排出量は、約 642.4 トンになる。

CO<sub>2</sub> の吸収源とされる森林だが、642.4 トンの CO<sub>2</sub> を吸収するためには、約 73 ヘクタール<sup>\*1</sup>が必要となり、これは東京ドームに換算して、約 15.5 個分の広さとなる。

貴重な天然資源である陶石を用い、CO<sub>2</sub> を多く排出する焼成という工程が必須な陶磁器産業であるからこそ、今回のパネル展示を通じて、環境負荷軽減のための対策が必要であることを広く伝えるとともに、産地内および市場において有田焼産業の持続可能性のための収益率の向上や産業廃棄物などの課題について考え、行動する機運を高めることを目指した。

### 3.4 応援型チャリティによる規格外品の社会実験販売

現在、伊万里・有田焼の陶磁器産業は、受注減少、原料や燃料・人件費の高騰による利益率の減少、後継者や人材の不足、CO<sub>2</sub> 排出や産業廃棄物の問題など、さまざまな課題を抱えている。この状況を鑑み、パネル展示説明による SDGs への NEXTRAD の考えや取り組みをしっかりと伝えた上で、持続可能な産業の構築に向けての試みのひとつとして企画されたのが、規格外品の実証実験販売である。産地の実情を研究している長崎県立大学に協力いただき、学生に説明要員として参画してもらった。

磁器は、道具としての機能に問題のない安全な商品であっても、ほんの小さな鉄粉やピンホールひとつで規格外品として廃棄されたり価格を下げた販売されたりしている。今回の実証実験販売の目的は、これらの規格外品が一般にどれほど受け入れられるものであるかを検証することにある。

規格外品を Re-BIRTH 品(リ・バース品)と名付け、定価で販売し、その収益の一部を森林保全活動に充てることで、その価値の社会的評価を探るというものである。規格外品の定価販売が可能になれば、収益率の増加や窯焚き回数減少による CO<sub>2</sub> 削減、産業廃棄物削減による地球

環境負荷の軽減につながり、産地の持続性が担保される可能性が高くなる。しかし、磁器は陶器と異なり、歪みやピンホール、鉄粉、釉ムラなどを「景色」として愛でる慣習がなく、特に有田焼は、昔から白さを追い求め、その繊細な技と端正な美を讃えられてきた歴史的経緯がある。こうした固定観念の中で、「本当に小さな鉄粉一つでも良品として認識いただくことはできないのだろうか」という疑問から始まったこの実証実験販売は、価値観の転換を図る一種の「攻め」の試みであると同時に、長い歴史を持つ有田の次世代を担う若手たちが、新たな歴史を紡いでいくための、真摯な覚悟に基づく挑戦の第一歩と言えよう。



社会実験販売のコーナー

### 3.5 オープンファクトリー

オープンファクトリーは、藤巻製陶と福泉窯にて実施した。2 日間、午前午後約 1 時間、日頃公開していないそれぞれの工場を、窯元自らが案内した。実際の職人の作業の様子が見学できるとあって、多くの事前予約があった。

藤本 浩輔氏が案内した藤巻製陶は、絵付けが一般的な有田では珍しく、白磁や青白磁など絵を施さない磁器を製造している窯元である。

分業制が一般的な有田焼産地での生産体制であるが、成形から焼成までを自社で手掛け、厳正な品質管理のもと生産を行なっている。「機械を使った量産体制ですが、完成するまでには、かなり多くの人の手がかかっているんです」と説明しながら、参加者に焼きあがった器の窯出しや釉掛けも体験してもらった。職人たちの実作業を近くで見ること、さらに体験することで、何気ない職人の手さばきが一朝一夕には真似できない経験に裏打ちされたものであるか、実感を伴って参加者の理解を促した。



藤巻製陶でのオープンファクトリーの様子

福泉窯を案内したのは下村 耕司氏。まず約 4,000 種にもおよぶという商品ラインナップの豊富さに参加者一同を驚かせた。有田ならではの絵付け技術を紹介しながら、「デザインは伝統的でなくても良い。しかし、工程には伝統を残したい。技術は一度失うと簡単には取り戻せませんから」と話し、筆仕事を残していきたいという強い想いを伝えていた。



福泉窯でのオープンファクトリーの様子

オープンファクトリーは、有田に訪問しなくては体験することができない、産地ならではの価値あるイベントコンテンツであることを関係者一同、再認識した。

#### 4. イベントへの参加者の反応と今後の展開

有田焼とは？それぞれの窯元の個性とは？持続可能な磁器のものづくりとは？どのようなものか。参加者がそれらをより深く理解し、産地が抱えるさまざまな課題についてともに考え、つくり手と問題意識を共有する機会の提供を試みた今回のイベント。これからの産地のものづくりを見据えた若手窯元たちの取り組みは、参加者からのアンケートやヒヤリング結果を見ても好意的に捉えられた。

展示を見学した産地商社からは、常態的に今回の詳細な工程展示が産地内で見られることを望む声や、持続可能な産業とするために、販売を担う立場として何ができるか考えたいという前向きな意見も聞こえた。

このイベントは、今回限りに終わらせず、ブラッシュアップしながら継続的に毎年実施していくことを検討しており、産地への来訪動機となる新しいコンテンツに育てていきたい。400 年続いてきた伊万里・有田の磁器のものづくりを次世代へ継承していくため、NEXTRAD の“13P”の挑戦はこれからも続く。

#### 5. 特筆すべき成果

- 同業者が集まり、産地の課題や今後の取り組みに関して、意見交換や情報共有する場の創出
- 産地だからこそできるイベント企画により、産地に訪問する機会と目的の創出
- 展示を通じた情報発信と体験による実感を伴う理解の促進
- 製造から販売に至る様々な事業者および同業者組合、有田町他支援組織などを横断した連携構築

#### 脚注

※1 林野庁 HP「地球温暖化防止に向けて」、国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 HP「森林による炭素吸収量をどのように捉えるか」を参考に算出

#### 参考資料

「NEXTRAD」公式 WEB サイト  
<https://nexttrad.jp/>